

G 3 グループ研究のまとめ

テーマ「基礎・基本の習得を図るための指導方法の改善」

(1) 重点目標と具体的授業実践

個に応じたきめ細かな指導方法の提案と検証について

- G 3 グループの子どもは、理解に時間がかかるのでスモールステップによる指導過程の工夫が必要である。
- グループの人数が 10 人前後のため、一人一人のつまづきを把握し次の指導に生かすことができた。
- 時間がかかっても割り算や分数、小数などの概念（意味理解）を理解させるための算数的活動を多く取り入れることが大事である。
- 単元の学習に入る前に、レディネスを確認し、必要であれば前学年の復習を行ってきた。
- G 3 グループの子どものレベルからすると、基礎的な問題を扱うことが中心になるが、きめ細かく指導すると予定時数を越えることがあった。限られた時数の中で、いかに効率よく指導するかが重要である。
- 4 年生の関・兼平グループが合同で授業を行ったところ、学習態度の改善が見られ適度の緊張感を持つことができ、効果的だった。

個を生かす評価の工夫について

- 「学習チェックカード」は、レディネステストでチェックして、単元が終わった後でもまたチェックしながら使用した。スキル学習で使用することで、めあてがはっきりしてきた。自己評価の手立てとして考えることができた。1 年間継続して使用するのは難しかった。
- ノート指導をしっかりとすることが大切である。一人一人に対して、ゆっくりきちんと書かせることを習慣化していく必要がある。ノート学習では、考え方を見ることができる。
- プリント学習では、表現処理能力を伸ばすことができる。しかし、数学的な考え方は評価をしにくい。
- ノート学習とプリント学習の兼ね合いをよく考えて指導する必要がある。
- テストのための復習に、今までファイルしていたプリントを使って復習することができてよかった。また、欠席した児童に対してもプリントを使って個別指導することができ、遅れを取り戻すことができた。
- 単元によっては、授業に対する感想を自由に書かせることで、子どもの本音が分かり指導に役立った。

「グループの習熟度に応じた指導計画の作成」について

- G 3 グループは、G 2 の指導計画をもとにし、児童の実態に適した授業が展開できるように修正を加えながら指導計画を作成してきた。
- G 3 グループでは具体物、半具体物の操作や体験を通じて課題を設定していく算数的活動の時間を十分確保した計画が重要である。また、課題提示や課題発見の段階において興味、関心を持たせそれをいかに持続させ算数としてのねらいに迫るかが大切である。
- 教科書で扱う内容でも特に基礎・基本に深く関わる点を中心に指導計画を立てていかなければならない。
- G 3 における児童の個人差にも配慮が必要である。児童の実態に応じて到達目標の設定や内容に工夫を凝らした指導計画を立てることが重要である。

スキル学習の取り組みについて

- 今年度単元に合わせてスキルの年間計画を作成し、それにそってスキルを実施してきた。前の学習を振り返り、確かめながら授業を進めていくことが特に必要なG3グループでは、単元に係わる内容のスキルがきちんと決められていることはとてもよかった。そして、スキルでの成果が直接学習内容の定着にも結び付き効果的であった。
- オリジナルスキルは、いろいろな変化があり、難易度も工夫されているため、児童の実態に合ったものを選ぶことができた。
- 計算を苦手としている児童が多いG3グループでは、形式の違いなどがマンネリ化を防ぐ方法にもなるので、バリエーションの多いオリジナルスキルは、子どものやる気を起こさせることにつながった。

学習支援ボランティアとの協力・連携について

- 昨年度と比較すると、限られた時間の中で、できるだけ打ち合わせを持つようにすることで、一歩踏み込んだ指導ができるような連携体制を作った。
- 休憩時間や授業中の児童の様子を観察し、担当教師が指導に生かせるような情報を伝える役目を進んで行い、児童を多面的にとらえる協力が得られた。
- 単なるお手伝いではなく、授業を共に創っていく側として関わり合い、よりよい児童との関係作りや、よい授業作りを、と思考する関係が生まれるようになった。
- 算数の学習支援ボランティア募集に対する応募が減少している。ボランティアとは自ら進んで行動を起こすこととするならば、今年度のように「頼まれボランティア」を増員しなければならなかった状態をどう考えるべきかが課題である。
- 保護者から寄せられたアンケートには、学習支援ボランティアに対する高い関心が見られた。しかし、その中には批判的な意向も伺える。実際に学習支援ボランティアを体験した保護者の建設的な感想とは裏腹に、このような否定的な反響が出てくる背景を無視することはできない。3年を経て、一つの過渡期を迎えたと考えられる。

(2) 今年度の成果

- 子どものつまづきを把握し、すぐに指導を行ってきたことで、一人一人の基礎基本の定着を図ることができた。(指導と評価の一体化)
- 基礎的な計算力の向上を図る意味で、オリジナルスキルは効果的だった。
- 算数的活動を多く取り入れたことで、体験を基にして学習内容を理解することができた。
- 4月から学習で使用したプリントをファイルに保管し、常に取り出して復習に活用することができたので大いに役立った。
- 子どもを多面的にとらえる点から、学習支援ボランティアの存在は大きかった。

(3) 来年度へ向けての課題

- 受身的な学習態度の子どもが見られるので、より積極的に学習に取り組めるように指導過程を工夫していかなければならない。
- より分かる授業を目指して、G3グループの発達段階に応じた具体物や半具体物などの教材の開発、共有化を考えていかなければならない。
- 評価の4観点の中で、特に「数学的な考え方」の力が劣っているように思われたので、筋道を立てて考えることができるような手立ての工夫が必要である。
- 自分なりの考えを明確にする意味で、ノートに自分の考えをきちんと書かせるというノート指導が大切になってくる。
- 学力保障の点から、より効果的な学習支援ボランティアとの連携を模索していく必要がある。